

〔Ⅳ〕 野 菜 作

岡 迫 義 孝

(宮崎県総合農業試験場)

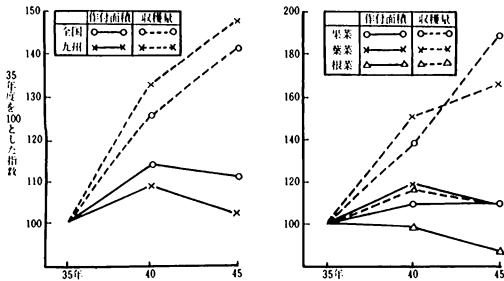
OKASAKO, Y.

(Ⅵ) Vegetables

九州の野菜作は、おかれて立地条件からして温暖性を利用した施設野菜が中心となっており、今後もこの傾向は変わらないと思われるので、ここでは一般露地野菜は割愛し、主として施設野菜について述べることにする。

1. 九州における野菜作の現状

わが国の野菜生産は、作付面積の上では40年をピークに、その後はや、減少傾向にある。(第1図)九州においても、同じ傾向がみられるが、これは農業情勢の変化に伴って零細規模の副業的農家が野菜作を整理したためである。しかし、残った農家は、経営規模を拡大し次第に専門化の方向に進みつゝあり、生産資材や技術の進歩と相まって、生産量は増加の一途を辿っている。中でも、果菜類と葉菜類の伸びは、著しいものがある。

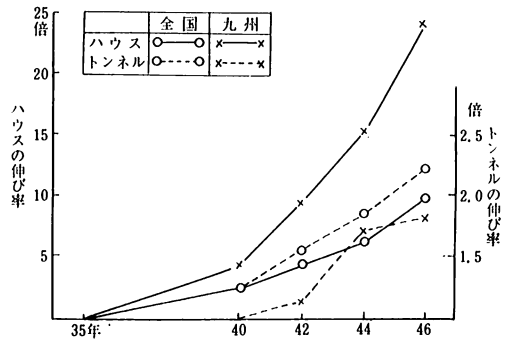


第1図 最近10年の野菜生産の推移(作物統計)

このように、九州の野菜生産は、最近急激な伸びを示しているが、これは施設園芸のめざましい発展によるものである。

(1) 施設栽培面積

第2図にみられるように、特にハウス面積の伸びは全国平均を大きく上廻り、この10年間に24倍という驚異的な伸びを示している。



第2図 施設栽培面積の伸び(農林省野菜花き課)

(2) 施設栽培農家数と1戸当たり施設栽培面積

ハウスで野菜を栽培し収穫した農家数(第1表)の伸びは、全国平均より九州の方が大きい。また、1戸当たりのハウス面積(第2表)は、九州の方が全国平均より1割方大きい。

第1表 ハウスで野菜を栽培収穫した農家数

	全国(A)	九州(B)	B/A
40年	66,729	9,565	14.4
45年	87,314	13,654	15.6
伸び率	130.8	142.3	

(農業センサス)

第2表 1戸当たりハウス栽培面積

	全国(A)	九州(B)	B/A
40年	412	456	110.7
45年	959	1,046	109.1
伸び率	232.9	229.5	

(農業センサス)

(3) 品目の多様化と果実的野菜の増加

最近、第3図にみられるように品目の多様化が進み、中でもメロン類、スイカ、イチゴのような果物的野菜の伸びが著しい。トンネル栽培では、スイカがとび抜けて多く、次にメロン類、カボチャの順であるが、カボチャはや、停滞気味である。

(4) 生産施設の近代化

九州においても、最近生産施設の近代化が急速に進んでいるが、傾向としては他地域にくらべて、パイプハウスがや、多く、加温施設は暖地という土

第5表 省力化による経営規模の拡大（試算）

項目 作業名	キュウリ			トマト		
	現 行		改善目標	現 行		改善目標
	※ 全期間	※ 最盛期 1旬当り	※ 最盛期 1旬当り	※ 全期間	※ 最盛期 1旬当り	※ 最盛期 1旬当り
保温、灌水	時 243.5	20	2	287.7	20	2
追 肥	13.1	3	0.5	16.2	3	0.5
栽培管理	660.3	40	4	468.5	20	4
防 除	100.5	6	0.5	56.5	3	0.5
収穫調整	580.8	50	40	311.8	40	34
計		119	47		86	41
耕作 可能 面積	夫婦 2 人	㎡ 1,162	2,852	1,598		3,268
	夫婦+雇庸 0.5人	1,410	3,570	1,953		4,097

※農林省、昭和45産野菜生産費（宮崎県の事例）より

の自動化

ホ、収穫調整、運搬作業の機械化、共同選果

以上の中で、収穫だけは機械化の可能性がないが収穫期に毎日4時間程度のパートタイマーを入れることによって、かなりの面積拡大が期待できるので、行政的に遊休労力の組織化をはかることを考える必要がある。

(2) 単位面積当りの所得向上

イ、生産費の軽減

現状では、生産費の軽減はあまり期待がもてない。もちろん、肥料農薬などは、ある程度の節減は可能であろうが、それよりも施設費の増加の方が大きく、最近では過剰投資ではないかという声さえ聞かれる状況である。

ロ、収量の引き上げ

過剰投資にならないためには、収量を引き上げるか単価を引き上げるかということになるが、最近近郊産地でキュウリやトマトの長期多収栽培が注目されている。これは、秋まき越冬栽培のものを7～8月まで収穫するやり方であるが、九州ではこのような栽培は可能であっても、販売期間の面で制約をうけるので、そのまゝ真似するわけにはいかない。九州としては、立地条件からして短期増収技術の開発が、より重要と考えられる。いずれにしても、九州の現在の反収は、まだ引き上げられる余地が残っており、品目によっては技術面の改良だけで、今より20%位の収量アップは可能と考えられる。その場合、

品種、土壌生産性の向上、環境制御の合理化、病害虫対策などが重要な課題となるが、九州はご承知のように、北九州は冬季の日照が少ない、南九州は日照には恵まれているが土壌条件が悪い、といった生産基盤上のちがいがあるので、このことをふまえた技術確立でなければならない。

ハ、単価の引き上げ

前述のように、早出しの暖地とおそ出しの寒地とで、手取単価に差がないということは、暖地にとっては真剣に考えなければならない問題である。そのための技術対策は、要約すると第6表のようになる。

第6表 単価引上げのための技術対策

改善目標	改善すべき事項	生産技術の改善点	流通技術の改善点
単価の 引き上げ	稀少価値の生産 (高級品生産)	①新品目、新品種の導入 ②特色のある作型の確立	
	商品性向上	①優良品種の導入 ②品質に関連する条件の基礎的研究 ③病害虫防除法確立	①鮮度保持(貯蔵輸送、コードチェーン)技術確立 ②輸送病害対策
	流通体系の近代化		①輸送手段の選択 ②貯蔵輸送技術の近代化

これらの中で、生産面においては新品目、新品種の導入と作型の改善により、暖地として特色ある産地づくりをすることが、重要と思われる。また、九州のような遠隔地では、流通体系の近代化は生産改善に劣らぬ重要な問題である。宮崎県では、全国に先がけて海上長距離輸送を実用化したのが、流通技術は残された問題が多く、早急にその確立が望まれている。

3. おわりに

年による変動はあるが、野菜はすでに生産過剰時代を迎えようとしている。この中にあって、今後九州の野菜作が伸びていくには、比較的恵まれている土地、労働、温度条件を十分に活用し、経営規模の拡大による高位生産の方向に進むべきであり、同時に技術の向上により生産品の高級化をはかることが必要と考えられる。